

2012年2月7日

古典教室・最終回の要綱と資料

## マルクス、エンゲルス以後の理論史（レジメ）

- 一、古典学習の基本姿勢——マルクス、エンゲルスを現代に生かす
- 二、継承者としてのレーニンの態度
- 三、スターリンは、「マルクス・レーニン主義」の名で、マルクスの理論を別個の理論体系におきかえた。
  - イ、経済学と世界論。「資本主義の全般的危機」の理論。
  - ロ、社会主義の理論。ソ連の現体制を絶対的モデルに。
  - ハ、革命論。武力革命が革命の普遍的原則。多数者革命路線の抹殺。
  - ニ、世界観。スターリン・テーゼ（『弁証法的唯物論と史的唯物論』）
- 四、スターリンの後継者たち（フルシチョフ以後）。
  - 覇権主義と専制主義と同時に、理論体系の基本も受け継いだ。
- 五、日本共産党の闘争。
  - 干渉主義に反対すると同時に、自主独立の立場で全戦線にわたって科学的社会主義の本来の立場を取り戻す理論闘争に取り組んだ。
  - その国際的位置。

## 〔資料1〕 マルクス、エンゲルスに対する態度

レーニンの場合。

「私は、生涯のうちにエンゲルスを日和見主義的だといって、せっかちに非難するのを非常にたくさん見うけましたが、そういう非難にたいしてはきわめて不信な態度をとっています。まあやってみたまえ、エンゲルスがまちがっていたということを、まず証明したまえ!! と。証明はできないのです!」

『フランスにおける階級闘争』のエンゲルスの序文はどうですか? あなたは、この序文がエンゲルスの意志に反してベルリンでゆがめられたことを、知らないのですか? ほんとうにこれはまじめな批判でしょうか?

ベルギーのストライキについての彼の声明ですか? いつ? どこで? どんな言明ですか? 私は知りません。

いや、いや。エンゲルスも無謬ではありません。マルクスも無謬ではありません。だが、彼らの『誤り』を指摘するには、これとはちがった仕方です、まったくちがった仕方を取りかからなければなりません。そうでないと、あなたはひどくまちがっているです。」

イネツサ・アルマンドへ 一九一六年二月二五日 全集「35」281ページ

スターリンの場合。

「レーニン主義とはなにか。

レーニン主義は、帝国主義とプロレタリア革命の時代のマルクス主義である。もっと正確にいえば、レーニン主義は、一般的にはプロレタリア革命の理論と戦術であり、特殊的にはプロレタリアートの執権の理論と戦術である。マルクスとエンゲルスが活躍したのは、発達した帝国主義がまだなかった革命前(われわれはプロレタリア革命のことをいっているのであるが)の時期、プロレタリアを革命のために訓練する時期、プロレタリア革命がまだ直接的、実践的に不可避的なものでなかった時期であった。ところが、マルクスとエンゲルスの弟子であるレーニンが活躍した時代は、発達した帝国主義の時期、プロレタリア革命の展開期、プロレタリア革命がすでに一国で勝利をおさめ、ブルジョア民主主義をうちくだいて、プロレタリア民主主義の時代を、ソビエト時代をひらいた時期であった。だからこそ、レーニン主義はマルクス主義のいっそうの発展なのである」

『レーニン主義の基礎について』一九二四年四月〜五月 スターリン全集⑥86ページ。

〔資料2〕 日本共産党の理論的発展の節目

- 60年 81カ国の共産党・労働者党の国際会議。声明を採択。
- 61年 8大会。党綱領採択。  
社会の段階的発展論。  
多数者革命路線。
- 63～64年 アメリカ帝国主義論。
- 64年 干渉主義の批判。
- 66年 国際統一戦線論。
- 67年 武力革命原則論批判。  
毛沢東路線批判。
- 68年 「社会主義」の名による侵略批判（チェコスロバキア事件）。
- 69年 千島問題の理論的・政策的説明。
- 70年 11大会。人民的議会主義。  
社会主義の政治体制論。
- 73年 12大会。農業集団化批判。
- 76年 13大会。「マルクス・レーニン主義」の呼称廃止。  
プロレタリアート執権問題。  
「自由と民主主義の宣言」。
- 77年 14大会。今日の段階は「世界的には、まだその生成期を経過しつつあるにすぎない」（生成期論）。
- 80年 15大会 アフガニスタン侵略批判。
- 81年 ソ連大国主義の歴史的決算。
- 85年 17大会。「資本主義の全般的危機」規定の廃棄。
- 91年 ソ連崩壊―覇権主義の崩壊として歓迎。
- 94年 20大会 綱領改定。  
ソ連論・社会主義とは無縁の人間抑圧型社会だった。  
野党外交路線（異なる世界観をもつ文明との共存と接近への実践的踏み出し）。
- 99年 市場経済と社会主義の問題の説明。
- 02年 新綱領採択。世界論。
- 04年 未来社会論。

〔資料3〕 一九七〇年・第一一回党大会の決定から

★大会決議「七〇年代の展望と日本共産党の任務」

第一一節「民主主義の擁護と日本共産党の態度」から

「わが党がめざす新しい日本においては、ブルジョア民主主義の制約を打破して、国民の民主的な権利と自由、政治的民主主義の制度はさらに発展させられ、強固に保障される。

(イ) わが党は、主権在民の徹底した実現をめざす立場から、議会制民主主義をはじめとする政治的民主主義の擁護と発展を一貫して重視し、国の政治制度の問題について、独立・民主日本においても、社会主義日本においても、『名実ともに国会を国の最高機関とする人民の民主主義国家体制』（綱領）を基本とする態度をとっている。

(ロ) 独立・民主日本では、暴力で人民の民主主義制度を破壊しようとする行動をとらないかぎり、政府に批判や反対の態度をとる政党をふくめて、すべての政党にたいして、活動の自由が保障されるし、選挙で国会の多数をえた政党が政権を担当することも、制度上当然のことである。

言論・表現・出版・集会・結社の自由は国民の基本的権利として保障され、はたらく人民がこれらの権利を現実享受できるように、実際の物質的保障も確立される。

(ハ) これらの民主主義的達成は、労働者階級の権力が樹立される社会主義の日本にも発展的に継承される。社会主義日本においても、共産党の一党制度はとらず、社会主義建設を支持する政党と協力することはもちろん、社会主義を批判する政党も一般には禁止されず、言論・表現・出版・集会・結社の自由、信教の自由も保障される。しかし、不法な暴力的手段で社会主義制度の転覆をたくらむ反革命勢力が法によって規制されるのは、当然である。

民主主義の問題にたいするわが党のこのような態度は、党利党略的な当面の打算にもとづくものではない。独立・民主日本においても、社会主義日本においても、国民の民主的自由と政治的民主主義を一貫して保障し、反動的な思想や潮流にたいしても基本的には言論と思想のたたかいでこれを克服する態度をとることが、国民の多数の確固とした支持のもとに、新しい社会の真の安定と発展をかちとる道であり、社会主義の建設をめざす労働者階級の政治的支配を、本当の意味で実現し強化していく道である」。

★中央委員会報告から（報告者・宮本顕治書記長）

「レーニンはロシア革命において、ソビエト権力を反革命からまもる必要から、普通選挙権の制限など、政治的民主主義に一定の制限を加えなければならなくなったときにも、これがロシア革命の特殊な状況下でとられた、いわばロシア的な措置であることをいつも強調し、あとからくるヨーロッパその他の革命が機械的にそのやりかたをまねてはいけないうことについて、なんべんも警告を發しました。……つまり、かれは、ロシア革命におけるプロレタリア独裁「執権」のありかたを、けっして先進的な資本主義国の革命で

そのままひきうつすことをいささかも予想していなかっただけでなく、それとは別個の形態でのすすみかたもあることを考慮にいました。

もちろんロシア革命は、地球上最初に搾取制度を打破して社会主義社会をうちたてた革命であるという点において、レーニンに指導されたロシアの労働者階級とその前衛党の偉大な事業であるだけでなく、世界史上に新しい時代をひらいた偉大な成果であり、社会主義の普遍的な法則に属するものをうちたてました。……

しかしそのことは、日本の未来において、新しい日本における政治制度の具体的ありかた、言論、表現、出版、集会、結社などの基本的人権のありかた、民主主義のありかたについて、ロシア革命にあつたそのものくりかえしを要求するものでないことも明白であります。そこにまた、ブルジョア民主主義とプロレタリア民主主義の階級の本質の相違と同時に、マルクス・レーニン主義、科学的社会主義は、人類の達成したこれまでの価値あるものの集大成であるという大きな命題にたつて考える場合には、人類が封建社会から資本主義社会にすすむ過程のなかでうちたてた代議制度、この代議制度を新しい社会のなかで、より質的に高いものに改造することは、人類の、価値ある遺産の合法的な発展を望む科学的社会主義としての基本的な理念であります。したがって、社会主義社会になつても、階級闘争がなお存在する条件のなかで、社会主義制度に批判的な勢力にたいして、行政的な規制を第一義としないで、思想と言論による啓蒙や闘争を主として、そしてこの方向によつて、国民の多数者を人民的権力や社会主義権力の周囲に結集して強大な社会主義統一戦線をつくることは理論的にまったく可能であります。われわれが提起している命題は、こうした進んだ資本主義国での社会主義革命における新しい実験であるとしても、それは、社会発展の科学的原則のわくのなかにあるのであつて、けつして恣意(しい)的なものではありません。われわれは、そういうやりかたを他国の革命に押しつけようとするものではない、いささかもありませんが、発達した資本主義国の条件に応じた新しい可能性の探究が、今日の状況では可能であるし、可能であるならば、それにもとづく新しいビジョンを、日本の社会主義の未来にかんして知ろうとする多くの国民に提起するものであります。

「すすんだ資本主義国の革命は、まだ本格的にはこの地球上で実現されておりません。したがつて、これはたしかに、新しい、人類の偉大な模索と実践の分野です。そこには、新しい複雑性ととも新しい可能性が横たわるでしょう。わが党が、人民解放、労働者階級解放の科学にもとづいて、人民の多数の民主的志向を尊重しながら、勇敢に、賢明に、できるだけ犠牲の少ない、社会変革と社会主義建設の道を探究するために全力をつくすことは、人民と真理にたいする重要な義務であります」。